

二〇二六年度 洛星中学校入学試験 (国語) 【前期日程】

※ 問題は冊子形式で、全部で18ページあります。

※ 解答用紙は問題冊子の中にはさんであります。

※ 解答は欄らんをはみ出して書いてはいけません。

【一】 次の文章は、『野生』(高橋 三千綱 作) という小説の一部です。よく読んで、後の問いに答えなさい。

(本文までのあらすじ)

友人に雀獲り用の罠を見せられた小学生の和雄は、罠を自作し、河原堤の手前にある原っぱに仕掛けた。友人の父が雀を好んで食べると聞き、自分も雀を捕まえて、病気の父に食べさせたいと思ったからである。次の日の朝早く和雄は河原に向かった。昨日仕掛けた罠には雀がかかっていたが、和雄が罠を確認しようとした瞬間に、逃げて飛び去ってしまった。罠を仕掛けなおし、河原堤まで戻った和雄は、近くに落ちていた棒切れをバット代わりにして小石を打った。和雄は野球クラブに入っており、ライトを守っている。

小石を拾って、今度は野原のはずれにある灌木に向けて打った。石は小気味よい音をたて樹木の中に飛んでいく。雀は当分かかりそうになかった。今日はだめかもしれないと思った。続けて五回小石を打った。どれも棒の芯に当って、当惑するほどの飛距離がでた。早く九番から抜け出したいと思った。

次の小石を拾って打とうと身構えたとき、不意に堤の下から男が顔を出した。はっとした。小石が男に当たったのかと思ったのだ。

男は黙って和雄を睨み上げていた。髪の毛を眉毛が隠れるほどに長く垂らした痩せた蒼い顔が、陰しい目付きをもって草の上に現われている。和雄は寒気を覚えた。男が血塗れた刃物でも片手にぶら下げているような気がした。①和雄はその場に立ち竦んでしまった。

「石を打つの、やめてくれないかな」

厳しい表情にしては意外なほど、小さく細い声で男はいった。和雄は②唇を尖らせて俯いた。

「鳥がね……」

男は続けた。抑揚のない声だった。

「鳥が逃げちゃうんだよ」

和雄は上目遣いに男を見て、それからこつくりと頷いた。顔を上げたとき、男は消えていた。和雄は棒きれを力いっぱい河原に向けて投げ棄てた。遠くに飛んだ棒は、空中で何度か旋回した。胸につかえる重たいものを感じながら、和雄は堤を降りて、雑草の茂る野原に立った。十メートルほど向こうを、先程の男が歩いていた。眺めていると、急に男の姿は背の高い葦がかたまつて生えている中に消えた。それきり、男の姿は見えなくなった。

何気なく和雄はそちらの方に向かって歩いた。自分が罌を仕掛けた場所も、葦の近くにあるはずだった。向かいながら、男が、鳥、といった言葉にひっきりかきを感じていた。小鳥屋さんかな。男の後姿は頼りなげで、ひどくさびしそうだった。男が和雄に向かっていった言葉遣いで、こわい人ではない、ということを和雄は本能的に感じとっていた。

男は葦の中にしゃがみ込んでいた。和雄はそつと近付いた。男は和雄をちらりと見たがすぐに頭を戻して野原に視線を向けた。

始めは、糞でもしているのかと思つたが、どうもそうではないようだと分かつた和雄は、男にならつて、葦の外で彼の見つめている先に視線をやつた。十五メートルほどの野原の向こうに、灌木があつた。

何かが、樹木の間で閃いた。細い光が幾重にも交差して、波のように揺れた。横に移動して別の角度からそのあたりを見た。網が見えた。縦横に白い糸を張つた網が、灌木の中で広い口を開けて何かを待ち構えている。②和雄は男の存在を忘れて、小走りに網の方に近付いていった。

繊細な糸だった。触れると、指に柔かく噛みついてきた。木と木の間に張られた網は、見る角度によつて透明にきらめいた。細かい網の目から抜けでた風が、和雄の顔に当たってくる。バックネットみたいだなと思つた。網の上と下を自由にくぐり抜ける風に乗つて、細い糸は羽衣のように身を震わせて泳いだ。その爽かな踊りに和雄は見とれていた。

「坊や、悪いんだけど、そこを離れててくれないか」

背後に男が立って、困りきった面持で和雄を見下ろしていた。

「これ、おじさんの？」

「ああ」

男はすぐに後を向いて歩き去った。和雄はあとを追った。並んで歩きながら男の尖った頬骨を見上げた。

「あれは何？」

男は俯いて、靴にからみついてくる草をそと避けながら歩いた。数歩進んで返事をした。

「かすみ網」

「あれでどうするの？」

「鳥がひっかかるんだ」

「鳥が……」

「網にからんで動けなくなる」

「それを手でとるの？」

「そう」

和雄の眼に映る野原と堤と、その上に広がる大空が、朝の光の中で黄金に染まった。③甘く伸びのある陶醉感に和雄は満たされた。

鳥が網にかかる。それは和雄にとって一つの発見だった。河にいた小魚を投げ網で獲るのは容易だった。河は幅に限られている。魚のいることは当然分かっている。そこでは、魚が獲れたかどうかより、何匹かかったかが問題になる。だが、空は無限だ。どこへ行っても壁がない。その空を勝手気儘に飛び回る小鳥を網で獲る。この手でそいつをつかまえる、素晴らしいことだった。

釣りをしている頃、和雄はこれは戦いだと思った。自然の中で棲息し、自然を糧に厳しい条件の中で生き抜いている魚たち。人間には想像のできない強い意志を持ち、食物を獲得し、繁殖を続けることのみに生きる素朴な生理感覚を持つ者たち。それらを釣り上げるのは戦いだと思った。戦いに勝った者のみが、それらを口にすることができると信じた。

「そこらに生えている草やくだものだけをとって食べれば、どのくらい人間は生きられるの？」

いつだったか、和雄はそう父親に訊いたことがある。父親は血の気の失せた顔をアパートの窓に向けて、

「半年くらいだろう」

といった。和雄は頭を振った。

「半年で人間はみんな死んじゃうのか」

「だから畑を耕したり豚を飼ったりするのさ」

「だけど河にいる魚や山の兎なんかはちゃんと生きているよ」

「互いに食い合うからね、動物は。だから自然の中で与えられたもので生きていられるんだ。人類は定員オーバーなんだよ」

そのとき和雄は鮎のことを考えていた。あいつらも、あいつらなりに自分の領地を守って、そこから獲れる食料を食って生きているのだ。だがそれはやつらが作ったものじゃない。河が生みだした自然を食って生きているのだ。釣り上げられた鮎は、自然に負けたことになるのだ。和雄はそう思った。それでもなお、河で生きている魚がいることは驚きだった。たくましいものだった。

それが今では、空を飛びかう小鳥さえも手に入れることが可能になった。釣りをしている和雄には、鳥までは頭が回らなかった。あいつらはとても無理だとあきらめていたふしもある。それ以前に、羨しさが先に立っていた。野生の鳥を獲まえて丸焼きにする。それは、④人間にだけできる、生きるための条件のように思えた。小

学生の自分にもそれができることは、大きな喜びだった。

男は元のように、葦の中に身をひそめた。堤の上を、自転車に乗った男が通り過ぎた。そちらの方に顔を向けた男は、小さな舌打ちをして腕時計を見た。

(中略)

帰宅した和雄が、病気が快方に向かいつつあった父に雀が好物かどうか尋ねると、父は「昔は何度か食べたことがあるな」「筋っぽかったけどうまかった」と語る。和雄が野原のことを話すと、父は、かすみ網で鳥を捕るのは禁じられているはずだが、と言った。和雄は「黙っていれば平気だ」と言って翌日も野原に向かい、再び男と会った。話すうちに男も野球をしていたことを知り、和雄は嬉しく思う。家庭に病人がいたので野球を断念し、今では靴の修理の仕事についている、と男は語った。

「病人ていうのは、やだよね」

男は和雄に顔を向けたが、すぐに動きのない瞳をかすみ網にあてた。

「いつでも家でゴロゴロしていてさあ。怒鳴ってばかりいるんだ」

「病人がいるのか」

「うん」

数カ月まえまで、ほとんど寢床で過していた父親の痩せた軀を思い浮かべた。散歩に出ることもめつたになり父親の、楽しみがどこにあるのか和雄には分からなかった。

「だけでもう大分いいんだ。仕事もできるみたいだよ」

「そう」

五分歩くと父親は息切れをした。外に出られない父親の代わりに、自分はここで雀を獲っているのだと思った。

⑤ ほんと、おとうちゃんがすればいいんだよな、和雄は胸の内つぶやで呟つぶやいた。狩かりをしたものを子供たちこどもたちに食くわせる父親ちちのたくましい男おとこくささが和雄の脳裡のうりを幻まぼろしのように駆け抜ぬけた。

「おじさんちの人は何の病気？」

「糖尿病とうりょうびょう」

耳慣れない病気だった。

「そいつが悪化して親父は眼が見えなくなり、半身不随ふずいになった」

「おじさんが代わりに働いたんだ」

「姉がいたけどね、もう嫁よめにいった。子供もいる」

「ひとりで病人のせわをするの、たいへんだな」

「もう死んだ」

男は中腰ちゆうこしになって葎わづを掻かき分けた。灌木きんぼくの間に張られたかすみ網をしばらく凝視ぎようししていた。小さな溜息ためいきを吐ついて男は腰を下ろした。

「靴屋くつやさんでずっと坐すわっているんですよ。ぼくはそういう仕事、いやだな」

「靴屋は十年前にやめたよ」

「あきたんだね？」

「飽あきた？」

男はいった。微かすかに頭を振った。

「まあ、そんなものだな」

「やめてどうしたの？」

「一人で家でやっている。下請うけけさ」

「お客さん、よくくる？」

「誰も来んよ。全然来ない」

「その方がもうかるんだね」

「収入は半分に減った」

男は少ない収入から、食事代をきりつめてかすみ網を買ったのだといった。男の口調はぶつきら棒だったが、それは確かに一人で生活している大人だけが持つことのできる言葉遣いのように和雄には思えた。孤独こどくな人なの
だと思った。

「雀って、おいしいの？」

「さあな」

面倒臭めんどうくさそうに男はいった。その言い方も和雄の氣にいった。手に入れた雀を、うまいまずいにかかわらず、誰の世話にもならず生きるためには食らいつかなくてはいけない男の果てしないたくましさを感じた。

このおじさんは、おとうちゃんとはくくの二人合わせたぶんを一人でやっているんだ。⑥男のように生きるには、相当の体力と暗闇くらやみなんかをこわがったりしない勇氣が必要なのだろうと和雄は思った。夏に海の家に行ったとき、外にある便所まで、夜、どうしても行くことのできなかった自分の情なさけない臆病おくびょうさを和雄は恥はじた。

「雀はぜんぜんかからないね。ぼくがいっしょにいるからかな」

「そのうちかかるさ。たくさん獲ったら坊やにもあげるよ」

「うん」

そう返事してから、和雄はちよつと考えた。ぼくはもう十一歳さいなんだ。顔を上げていらないよといった。

「自分で獲るからいいよ」

「そうか」

男の顔付きがゆるんだ。灌木の中のかすみ網には変化が起こらない。白いきらめきが遠いところで揺れている。男はあくびをして立ち上がった。

「だめだ。帰ろう」

和雄も立ち上がって尻をはたいた。

(中略)

翌日、和雄は野球の試合に臨んだ。チームは善戦したが、和雄は一本も打てず、しかも自らのエラーが原因で敗れてしまう。和雄は野原で雀を追う男の厳しい目付きを思い出しながら、そうはなれない自分がいない自分にもどかしさを感じるのであった。

翌朝、河原に向かう和雄の心は複雑だった。二日も時を置いたのだから、雀が仕掛けにかかっている可能性が高く、そのことからくる気持の高ぶり、前日の失策にみるように、いつでも都合のいい夢ばかり見ているふやけた、少しも自分に戦いを挑もうとしない④ちやちな性格に対する嫌気が、絡み合って重たく胸にのしかかってくる。きていた。

仕掛けは以前のままだった。一度罠に掛けられたら、雀は容易にそれに近付かないことを和雄は知った。相手も必死なのだった。

いつもいる葦の中に男の姿はなかった。野原に出た和雄は堤の上を見て、それから灌木の間に視線をやった。かすみ網の前に男が立っていた。網の中に手を突っ込んで、しきりに何かやっていた。和雄は男に向かって走った。

男は和雄を眼にとめて、白い歯をこぼした。獲ったよ、と大声でいった。嬉しさが溢れていた。

和雄が男の傍にいったとき、雀は嘴を忙しく動かしながら短い声をあげて男の手の中に握られていた。和雄

が手を出すと、キツ、と鳴いて突こうとした。

「今日はこれで二羽目だよ」

男は少し鼻にかかった声でいって、雀を持ってきた鳥籠とりかごの中に入れた。中に入った二羽は互いに鳴き声をあげて、鳥籠の針金めがけて飛んではぶつかっていた。

「どうして鳥籠に入れるの？」

「持ってかえるのさ」

「ここで殺すんじゃないのか」

友達のやった仕種しぐさが頭に浮かび、ぼくにだってできるのと思った。

「殺す？」

男は鳥籠を顔の前に上げて、◎けげんな眼で和雄を見下ろした。

「そんなことしないさ。家で飼うのさ」

「飼うの？」

和雄には男のいった意味が分からなかった。雀を草の蔭かげに隠れてまでして獲る行為こういと、それを飼うという意味が頭の中で結びつかなかった。男は鳥籠の中で暴れる二羽の雀を見つめている。一仕事終えた満足感がその表情に満ちていた。

「雀を食べるんじゃないの？」

「食べやしないさ、こんなもの」

じゃ、どうして獲るのだという言葉が和雄の口から出かったが、やめた。⑦男が嘘うそをついているように思えたのだ。恥はずかしいからそんなことをいうのだと和雄は理解していた。

「部屋にはもっと大きな鳥籠があるんだよ。無理して買ったんだ。そのかいがあるってもんだ」

「そこにこれを入れるの？」

「そうさ」

「じゃ、ほんとうに飼うの？」

「そうさ。かわいいもんだ」

「だ、だけど……」

思わず口ごもった。

「だけど、飼ってどうするの？」

「どうって、眺めているのさ。遊び相手みたいなもんだな」

和雄は男を見上げて唇を尖らせた。今まで感じられた男の持つ厳しさが失せて、急に平凡な、どこにでもいるさみしがり屋の大人の姿になった。和雄の心を塞いでいた重たいものは解けてしまい、いつの間にか奇妙に軽いばかげた空虚さが宿っていた。

「眺めるだけなの……」

「これで六羽目だな。山鳩でもかかるといいんだがな」

⑧男の唇は濡れていた。そのくせ顔全体は薄っぺらく乾ききっていた。

和雄は父親の影と向かい合っているような気がした。病弱ではあったが、遊び相手を厳しく拒絶していた父親が、歩くことに親しんだと思ったら、三十半ばの男の顔をして雀に心をなぐさめてもらっている。そうなった父親はもうおしまいだった。

和雄は男の前に佇んでいることに、何か不吉なものを感じた。

「前にとった雀もその大きな鳥籠の中にいるの？」

「いや、みんな死んだよ」

「どうして？」

「奴等^{やつら}はえさをやっても食わないんだ。みんな餓死^{がし}しちゃった」

「死んだ雀はどうしたの」

「棄てたさ。いずれこいつらも死ぬさ。野生の鳥は人間の与えるものを決して食わないんだ」

簡単にすてられてたまるか、と和雄は思った。野生の鳥がエサを食わないのはあたりまえじゃないか。

「雀が死んでいくのを楽しみにしているみたいだね」

「そんなつもりはないさ。飼いたいんだけど、こいつらがいうことをきかないだけさ」

「小鳥屋の鳥はちゃんとえさを食べるよ」

「あれはつまらない。自分で獲るから面白いんだ」

男は得意気にいって空を見上げた。頬骨に明るさがとまっていた。

「ぼく、帰るよ」

「そうか、まだ獲れるかもしれないぞ」

和雄は俯いて、草を踏^ふんだ。昨日まで孤^{ひと}りの時間を無造作に扱っていた男が、今日は雀を前にしてさびしさをまぎらわしている。その姿を想像することは、和雄にとってつらかった。いやなことだった。和雄は振り返らなかつた。⑨後^{うしろ}を見ると、父親もろとも、男の口の中に吸^すい込まれてしまうような気がした。くやしかった。

あの網をとつちやえばいいんだ。和雄は胸の内で叫^{さけ}んだ。

男はもとの険しい目付きを取り戻すかもしれない。それとも母親のよくいう、女の腐^{くさ}ったのみたいに、めそめそしながら壊^{こわ}れた靴を修理し続けることになるのかもしれない。そのどちらでも和雄にとってはよかった。男の雀を獲った満足そうな笑顔がただ許せないことのように思えた。網をとつちやえ。明るさを取り戻し始めた父親の顔が脳裡^{かす}を掠めた。

駅の近くに交番があったことを思い出した。坂道にさしかかりながら、なんといつて警官に説明したらよいかを考えた。

坂道を登りはじめると、自分の考えていることが急にばかばかしく思えはじめた。あんなつまらない男を相手にすることはないんだと冷め始めた頭で考えた。雀をとって飼うだなんて、やだよなあ。男と野球の話をして自分の楽しそうな表情を思うと、気恥きはずかしくなった。

坂道を登りきると、左側に住宅街が、右手に畑が広がっていた。鳥の囀さえずりがどこからか聞こえてくる。

可哀かわいそうだよ。唐突とうつに和雄は思った。雀が可哀そうだ。とったからには丸焼にして食ってやらなくちゃ、あいつらが可哀そうだ。⑩父親は喜んで食うに違ちがいがないと思った。

和雄は足を速めた。すずしい風が顔にあたってくる。交番に近付くにつれて、樹木の枝に罌を仕掛けてはどうかという考えが、和雄の頭に浮かんできた。

問一

本文中の二重傍線部④「唇を尖らせて」(10行目)、⑤「ちやちな」(132行目)、⑥「けげんな」(150行目)の本文中における意味として最も適当なものをそれぞれア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

④ 「唇を尖らせて」

ア. 失望している様子

イ. 怒っている様子

ウ. 不満そうな様子

エ. 驚いている様子

⑤ 「ちやちな」

ア. 貧弱な様子

イ. 安っぽい様子

ウ. みすぼらしい様子

エ. みっともない様子

⑥ 「けげんな」

ア. 不思議に思う様子

イ. 困っている様子

ウ. 人を馬鹿にする様子

エ. 機嫌の悪い様子

問二 本文8行目に傍線部①「和雄はその場に立ち竦んでしまった」とありますが、それはなぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問三 本文28行目に傍線部②「和雄は男の存在を忘れて、小走りに網の方に近付いていった」とありますが、

和雄がこのような行動をした理由として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア・男の見つめる樹木の間で風に吹かれて輝いている網がバックネットのように見え、強く興味をひかれてもつとよく見ようとしたから。

イ・男の見ている樹木の間^{あせ}に目の細かい網が張られていると知り、自分の仕掛けた罠の邪魔になるので早く取り去らなければと焦ったから。

ウ・男の視線の先で光っていたのが彼の仕掛けた網だと気づき、こわいおじさんではなさそうなので近づいてもよいだろうと思ったから。

エ・男が見ていたのは樹木の間できらめく網だと気づき、どんなものなのかが気になってたまらなくなり近くで見たいと思ったから。

問四 本文47行目に傍線部③「甘く伸びのある陶醉感に和雄は満たされた」とありますが、それはなぜですか。

わかりやすく説明しなさい。なお、「陶醉感」とは「うつとりとした感覚」という意味です。

問五

本文72行目に傍線部④「人間にだけできる、生きるための条件」とありますが、どういふことですか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア．別の感覚をもって生きている他の生物との知恵^{ちえ}比べに喜びを見出し、子どもながらに工夫をこらして捕まえて、生きるための糧とすること。

イ．自然界の頂点に立つ存在として、人間には想像できない生理感覚と強い意志をもつ生物たちを相手に戦い、生きるための糧を得ること。

ウ．自然の厳しい条件の中で生き抜くための競争に、武器を持たず他の生物と対等な立場で正々堂々と参加し、生きるための糧を得ること。

エ．与えられた自然の条件を知恵と技術によって超え、各々の領域で生き抜こうとしている他の生物をも捕まえて、生きるための糧とすること。

問六

本文86行目に傍線部⑤「ほんととは、おとうちゃんがすればいいんだよな」とありますが、和雄は「おとうちゃん」にどのような思いを抱^{いだ}いていると考えられますか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア．だいぶ病気もよくなってきたのだから、自分の食べたいものは自分の手で獲るべきだという思い。

イ．寝^ねているばかりで何を楽しみにして生きているのかわからず、父親としてなさないという思い。

ウ．病気のため寝ている時間の多い父親だが、本当は家族を養う力強い男であってほしいという思い。

エ．今は自分が雀を獲ろうとしているが、本当は父親がやるのが家族のためにも一番よいという思い。

問七

本文117行目に傍線部⑥「男のように生きる」とありますが、和雄は「男」をどのような人間として見ていますか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. 誰の世話にもならないで、一人でたくましく生きる人間。
- イ. 仕事で収入を得るだけでなく、余暇で狩りを楽しむ人間。
- ウ. 元気だった頃の父親にどこか似た、自然が大好きな人間。
- エ. 生きるためなら、嫌いな雀を食べることも我慢する人間。

問八

本文158行目に傍線部⑦「男が嘘をついているように思えたのだ」とありますが、このときの和雄の心の様子の説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. 和雄は、雀を獲ったら男も当然食べるはずだと思っており、「食べやしないさ」という発言をその言葉どおりのものとして受け入れられない気持ちになっている。
- イ. 和雄は、二羽しか獲れなかった雀を男が和雄に分けるのが惜しくなったのではないかと思い、「食べやしないさ」という発言に疑いを持ち始めている。
- ウ. 和雄は、男が和雄の目の前で雀を殺す残酷さを見せないために「食べやしないさ」と言っているのだと考え、男のやさしい一面を新たに感じ取っている。
- エ. 和雄は、男が「食べやしないさ」と言うことで、食べたいと思っている和雄を挑発しているのだと考え、それに乗るまいと心を落ち着かせようとしている。

問九

本文174行目に傍線部⑧「男の唇は濡れていた。そのくせ顔全体は薄っぺらく乾ききっていた」とありますが、この表現のもたらす効果の説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア・男の旺盛な食欲を感じさせつつも、何を考えているか分からない男に和雄が感じ始めた不気味さを強調する効果。

イ・雀獲りに成功した男の高揚感を感じさせつつも、飲まず食わずで雀を獲り続けた男の疲労感を強調する効果。

ウ・雀を獲った男の興奮を感じさせつつも、和雄が男に感じていた魅力が急速に失われていく様子を強調する効果。

エ・哀れな雀に対する男の同情心を感じさせつつも、自らの孤独感を癒すためだけに雀を獲る男の浅ましさを強調する効果。

問十

本文195行目に傍線部⑨「後を見ると、父親もろとも、男の口の中に吸い込まれてしまうような気がした」とありますが、どういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

問十一

本文208行目に傍線部⑩「父親は喜んで食うに違いないと思った」とありますが、ここで和雄は父にどのような思いを抱いていますか。父への気持ちの変化もふまえながら説明しなさい。

問十二 この小説のタイトルは『野生』といいますが、それはなぜだと考えますか。文章中の49行目～73行目を参考に、和雄の「野生」についてのとらえ方を説明したうえで、わかりやすく説明しなさい。

【二】

次の傍線部①～⑩のカタカナを正しい漢字に直して、楷書体で丁寧^{かいしよたい ていねい}に書きなさい。

- ・ 創立者の言葉を金科①ギョクジョウとする。
- ・ ②リメンに住所を記入する。
- ・ 頭に③ユゲを立てる。
- ・ パーティーの④ショウタイ状が届いた。
- ・ 文章を⑤ヒハンの的に読む。
- ・ ⑥ヒガタにはユニークな生き物がある。
- ・ ⑦マジメに練習する。
- ・ 昔のアルバムを見て⑧カンショウにひたる。
- ・ 警察による⑨キョウジュツ調書が提出される。
- ・ ⑩シャソウからの風景を楽しむ。

解答用紙（国語）

【1】

問一

Ⓐ

ⓑ

©

問
二

問三

問四

問五

問八

問十

問
十
二

問
十
二

【11】

①

⑥

②

⑦

③

⑧

④

⑨

⑤

10

問六

問七

問九

受験番号

氏 名

※ 評 点